

「ただいま」
「お帰り」

今日も元気に娘の詩織が高校から帰ってきました。

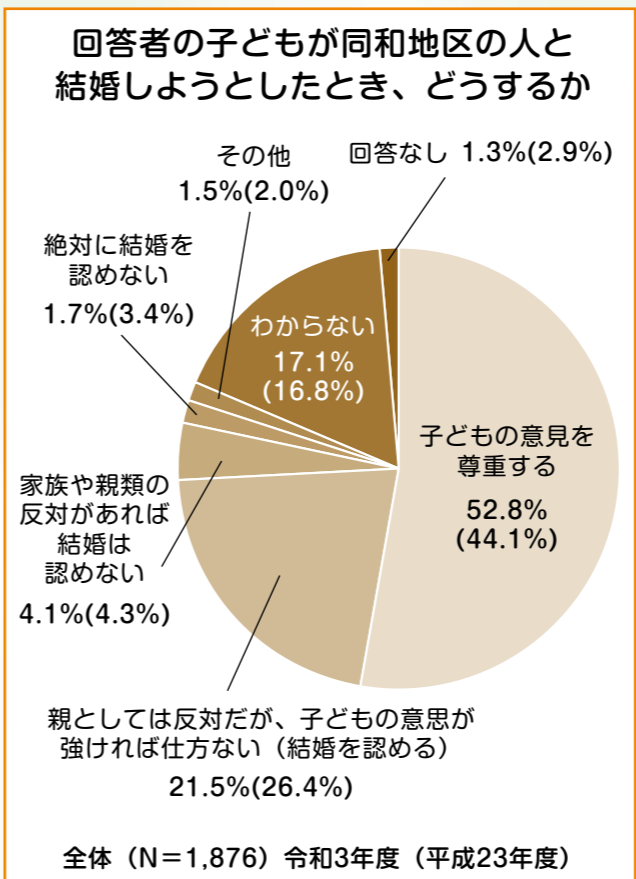
「お母さん、今日、学校で人権学習があったよ」

「へえー、高校でも人権学習ってあるんだ。何についての学習だったの？」

「結婚差別だよ」

「えっ、結婚差別」

「そうだよ。このグラフ見てよ」



令和3年度福岡県「人権問題に関する県民意識調査」

「子どもの意思を尊重するが52・8%しかないんだよ。日本の憲法では、『結婚は両性の合意に基づく』ってなっているのに、どうしてなの。お母さんどう思う」
「部落差別は、今もあるんだね。昔の話って思ったた」
「昔の話じゃないよ。今の話」
「だって、お母さん、自分に関係ないと思っていたら関係ない。それでいいのかっていうことを今日みんな考えてたんだ」
「みんな、どんな考えを言ったの」
「いろんな考えが出されたけど、一番多かったのは、自分のことを信じてほしいっていうこと」
「信じてほしい？」
「そうだよ。私が好きになった人。私が選んだ人。だから、私を信じてほしい。選んだ人を見てほしい」
「でも、結婚は二人だけの問題じゃない面もあるから・・・」
「それ、どういうこと？お母さんも『どんな人』じゃなくて『どこの人』って聞くの」
「それは、まだ先の話でわからない。心配なのよ」
「私のことを、心配してるの。それとも、私が同和地区の人と結婚したら、お母さんも差別されるかもしれないって思っているの」

「そうじゃないけど、いろいろと・・・」

「同和問題について、私もまだ詳しく知らないけど、お母さんもよく知らないよね。自分には関係ないと思って、無関心になり、本当の姿を知ろうとしないこと。それが、同和問題が今まで残っている大きな原因の一つだって先生も言ってたよ」

「そう言われると、今まで同和問題について考えたことがなかった気がする」

「私、17歳だよ。あと一年で大人だよ。結婚したいっていう人を連れてくるかもしれないよ。私ね、この家に生まれてよかったと思うてる。これまで、大切に大切に育てられたと思うてる。だから、私と私が選んだ人を信じてほしいの」

「そうね。もう少し時間はあるよね。これから、お母さんも関心をもってみる」

「ありがとう。これからも、いっぱい話そう」



「同和問題って昔のことでしょう」
「私には関係ないことだから」
「気にしてないから」
「差別があるなら、引越せばいいじゃん」
「こんな声が聞こえる」
「その一言一言に心を痛める人がいる声をあげると」
「そんなことぐらいで大ききな。悪気はないのに」
「という声が聞こえる」

私であることに胸をはり
私のふるさとを名のり
私の父や母を誇り
自分が自分であることを語り
それぞれがそれぞれを認め合う

どこで生まれていても、
どこで育っていても
差別を受けるために生まれた人は一人もいない
見つめてみよう 自分を
今、できることを

